

# 過去時制記号素との共起における 複合過去記号素と単純過去記号素の対立の中和

—— ディスクールとイストワールの弁別と大過去形 ——

川 島 浩 一 郎\*

## 0 はじめに

複合過去の動詞形と単純過去の動詞形の弁別は、ディスクールとイストワールの弁別の指標とされる<sup>1</sup>。複合過去の動詞形の使用は、ディスクールを特徴づけると言われる。単純過去の動詞形の使用は、イストワールを特徴づけると言われる。

- (1) On m'a dit qu'il avait eu des ennuis dans sa jeunesse. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.389)
- (2) Son mari m'a dit qu'elle avait eu un léger malaise. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.207)
- (3) Je m'étais retournée vers Bertrand. Il me regardait et, quand il vit mon sourire, se leva. (Françoise Sagan, *Un certain sourire*, Collection Le Livre de Poche, 1956, p.11)
- (4) Quand Bertrand eut payé les consommations, je me rendis compte qu'il avait dû pas mal boire. (Françoise Sagan, *Un certain sourire*,

---

\* 福岡大学人文学部教授

<sup>1</sup> ディスクール (discours) とイストワール (histoire) については、BENVENISTE (1966) を参照。

Collection Le Livre de Poche, 1956, p.54)

いわゆる大過去の動詞形は、ディスクールとイストワールの弁別に対応しない。たとえば（１）や（２）の *avait eu* は、複合過去の動詞形 (*a dit*) と共起している。（３）の *étais retournée* や（４）の *avait dû* は、単純過去の動詞形 (*vit, leva, rendis*) と共起している。つまり大過去の動詞形は、ディスクールにもイストワールにも現れることができる。

本稿では、過去時制記号素との共起において、複合過去記号素と単純過去記号素の完了アスペクト記号素としての対立が中和することを示す。大過去の動詞形に含まれる完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素の実現形でもなければ単純過去記号素の実現形でもなく、原完了アスペクト記号素（複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分）の実現形なのである。大過去の動詞形がディスクールにもイストワールにも現れうるのは、そのためである。原完了アスペクト記号素は複合過去記号素と単純過去記号素の対立の外側、言い換えればディスクールとイストワールの弁別の外側にあると言ってよい。

## 1 表意単位の対立とその中和

### 1.1 表意単位と実現形の対応関係

表意単位とその実現形のあいだに、一対一の対応関係はない。音声面でのあらゆる違い（声の大きさ、話す速さ、男女差、年齢差、地域差、個人差など）に着目すれば、同一の表意単位の実現形は無数に存在する。異音同義や同音異義の事例も少なくない。たとえば (*tu*) *assieds* と (*tu*) *assois* のように、同一の表意単位が異なる実現形をもつことがある。また *le tour* の *tour* と *la tour* の *tour* のように、異なる表意単位が（音声的な微細な違いを除けば）同じ形で実現することも珍しいことではない。

したがって表意単位の実現形が複数、任意に与えられたとき、それらが同一の表意単位の実現形であるのか異なる表意単位の実現形であるのかを判定する

基準が必要である (1.4 を参照)。その基準がないままでは, (tu) assieds と (tu) assois を異なる表意単位の実現形だとすることも, le tour の tour と la tour の tour を同じ表意単位の実現形とすることも, 恣意的にできてしまうことになる。

## 1.2 表意単位の実現形としての認定基準 (必要条件)

発話のある切片が表意単位の実現形であるためには, 少なくとも次の2条件が満たされることが必要である。条件 (a) 発話の一部分で, その切片を他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。条件 (b) この入れ換えによって, 発話の知的意味に弁別が生じる。知的意味という用語は, 大略, 言語共同体において共有される客観的, 離散的な区別にもとづく意味のことを指す。ゼロ切片は, 切片が不在の状態のことである。たとえば (5) と (6) では, bon と soleil を入れ換えることができる。つまり, bon と soleil が条件 (a) を満たす。また bon と soleil の入れ換えによって, (5) や (6) の意味に客観的, 離散的な弁別が生じる。つまり, bon と soleil が条件 (b) を満たす。したがって bon と soleil はそれぞれ, il fait ... という文脈において, 表意単位の実現形だと考えてよい。

(5) Il fait *bon*. (Éric Faye, *Nagasaki*, Collection J'ai lu, 2010, p.48)

(6) [...], il fait *soleil*. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Le Livre de Poche, 1959, p.33)

最小の表意単位は, 記号素 (あるいは形態素) と呼ばれる。記号素は, それ以上小さな表意単位に分節ができない表意単位である。つまり記号素の実現形の内部において上記の基準をみたす切片は, その記号素の実現形の全体だけである。たとえば (5) の bon の内部において上記の条件 (a) と条件 (b) をみたす切片は, bon 全体だけである。(5) の bon が, 記号素の実現形だからである。

### 1.3 表意単位の「対立」を認定するための基準（必要条件）

表意単位の複数の実現形（X, Yと記号化する）が対立すると言われるためには、XとYが、少なくとも次の2条件をみたすことが必要である。条件（a）X, Yを、発話の一部で入れ換えることができる。条件（b）この入れ換えによって、発話の知的意味に弁別が生じる。たとえば（7）の *fermés* と（8）の *cernés* は、互いに入れ換えることができる。つまり、*fermés* と *cernés* が条件（a）をみたす。そして *fermés* と *cernés* を入れ換えることによって、（7）と（8）の知的意味に弁別が生じる。つまり、*fermés* と *cernés* が条件（b）をみたす。したがって（7）の *fermés* と（8）の *cernés* は、この文脈（*j'ai les yeux ...*）において対立すると言ってよい。

（7）*J'ai les yeux fermés.* (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.50)

（8）*J'ai les yeux cernés.* (Brigitte Aubert, *Transfixions*, Collection Points, 1998, p.73)

X, Yが対立するのに対立しないのかについては、文脈ごとの個別の検証が必要である。ある文脈で対立するX, Yが、別の文脈でも対立するとはかぎらない（1.4.1と1.5.1を参照）。たとえば、ある文脈において不定冠詞記号素の実現形である [yn] は、別の文脈では不定代名詞記号素の実現形かもしれないし、何らかの固有名詞記号素の実現形かもしれない。あるいは [ynik] の冒頭部分かもしれない。表意単位とその実現形は、一対一に対応しないのである（1.1を参照）。不定冠詞記号素の実現形である [yn] は、定冠詞記号素の実現形である [la] と対立する文脈がある。しかし [ynik] の内部にある [yn] が、定冠詞記号素の実現形の [la] と対立する文脈は存在しない。

## 1.4 異なる表意単位の実現形であることを検証する基準

### 1.4.1 実現形のあいだに対立がある文脈

表意単位の複数の実現形 (X, Y と記号化する) が対立する文脈において、それらは異なる表意単位の実現形である。つまり X, Y が次の 2 条件をみたす文脈があれば、X と Y を当該文脈において異なる表意単位の実現形であるとみなしてよい。条件 (a) X, Y を、発話の一部分で入れ換えることができる。条件 (b) この入れ換えによって、発話の知的意味に弁別が生じる。たとえば (9) の moi と (10) の soif は、当該脈において対立する (1.3 を参照)。したがって moi と soif は、少なくとも当該文脈 (il a ...) において、異なる表意単位の実現形と考えてよい。

(9) Il a moi. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p. 49)

(10) Il a soif. (Sébastien Japrisot, *Adieu l'ami*, Collection Folio, 1968, p. 80)

(11) Il a moins froid, [...]. (Jean Echenoz, *Je m'en vais*, Minuit, 1999/2001, p.47)

ある文脈で対立する X と Y が、他の文脈でも対立するとはかぎらない。たとえば (9) の moi と (10) の soif は、il a ... において対立する。しかし (11) の moins に含まれる moi は、soif と対立しない。X, Y が対立するのか対立しないのかについては、文脈ごとの個別の検証が必要である (1.3 と 1.5.1 を参照)。

### 1.4.2 実現形のあいだに対立がない文脈

X, Y が条件 (a) をみたすが条件 (b) はみたさない文脈において、X と Y は同一の表意単位の実現形である。これらは、自由変異体の関係にあると言われる。たとえば tu t'assieds と tu t'assois のように、assieds と assois を入れ換えても発話の知的意味に弁別が生じない文脈にあっては、assieds と assois を

同じ表意単位の実現形であると考えざるをえない (1.1 を参照)。

X, Y が条件 (a) をみたさない文脈においては, X と Y が異なる表意単位の実現形であると言えない。ある文脈で X と Y を入れ換えることができるためには, その文脈に X, Y の両方が現れうる必要がある。X, Y のどちらも現れえない文脈では, X と Y の同一性や非同源性ははじめから問題とならない。存在しない X を存在しない Y と比較しても意味がないからである。また X, Y のうち的一方だけしか現れえない文脈においても, X と Y の同一性や非同源性は問題となりえない。このような文脈には, 比較対象となる X (あるいは Y) が存在しないからである。文脈の一部分で互いに入れ換えることのできない実現形, たとえば *le fils* の *le* と *une fille* の *une* について, それらを異なる表意単位の実現形であると言うためには, 特定の文脈を離れてメタ言語的な視点にたつ必要がある。

## 1.5 表意単位の対立の中和

### 1.5.1 機能的共通部分を備えた実現形が現れる対立の解消

ある文脈で存在する対立が別の文脈で消失する現象を「対立の解消」と呼ぶ。一方に X, Y (表意単位の実現形) が対立する文脈があり, 他方に X, Y が対立しない文脈があるとしよう (1.3 を参照)。このとき前者の文脈で存在した X, Y の対立は, 後者の文脈で「解消」していると考えることができる。後者の文脈で存在しない X, Y の対立が, 前者の文脈で「出現」と考えてもよい。いずれにせよ, X, Y が対立する文脈と対立しない文脈があるという事実にかわりはない (1.3 と 1.4.1 を参照)。

他の文脈で対立する X, Y の機能的な共通部分を備えた実現形が現れうるが, それらの実現形の間に対立が成立しない文脈が存在するとき, 後者の文脈において X, Y の対立は中和すると言われる<sup>2</sup>。中和は, 対立の解消の下位概念であ

---

<sup>2</sup> 中和の定義についての詳細は, たとえば MARTINET (1968) や AKAMATSU (1988) を参照。

る。X, Yの機能的な共通部分を備えた複数の実現形が互に対立しうる文脈(つまりX, Yが対立する文脈)にあっては、これらの対立する実現形が異なる表意単位の実現形とみなされる(1.4.1を参照)。一方、XとYの機能的な共通部分を備えたすべての実現形が互に対立しない文脈(つまりX, Yの対立に中和が生じる文脈)では、それらの実現形を異なる表意単位の実現形と言うことができない(1.4.2を参照)。なおX, Yの機能的な共通部分を備えた実現形間の相違は、単なる音声面での微細な違いであってもかまわない(1.1を参照)。

### 1.5.2 対立の中和が成立するための前提条件：排他的連関

X, Y(表意単位の実現形)の対立に中和が成立するには、その前提として、XとYが次の3条件をみたす必要がある。条件(I) X, Yが対立する文脈が存在する。条件(II) X, Yに機能的な共通部分がある。条件(III) その機能的な共通部分をもつのが、XとYだけである。条件(I), (II), (III)ないしは条件(II), (III)をみたす言語単位の複数の実現形は、排他的連関にあると言われる。

X, Yが対立する事例がなければ、その対立が中和することもない。中和すべき対立が、存在しないことになるからである。X, Yに対立の中和が成立するためには、X, Yが対立する文脈と、X, Yが対立しない文脈の両方が必要である(1.5.1を参照)。つまり条件(I)がみたされなければならない。

X, Yに機能的な共通部分がなければ「XとYの機能的な共通部分を備えた実現形が現れる」という中和が成立するための一要件がみたされないことになる。X, Yに機能的共通部分があることは、中和の定義の一部分と考えてよい(1.5.1を参照)。つまり条件(II)がみたされなければならない。

X, Yの他に条件(I)と条件(II)をみたす別のZがある場合、X, Yの対立だけが中和するような文脈は存在しえない。対立が中和する文脈があるとす

れば、その中和は X, Y の対立の中和ではなく、X, Y, Z の対立の中和である。中和の定義から、この文脈にあっては Z もまた X, Y と対立しないからである (1.5.1 を参照)。X, Y, Z の対立の中和ではなく X, Y の対立の中和だと言う場合、当該文脈に Z が現れることが想定されているはずである。しかし、この想定は、それが X, Y, Z の対立の中和であることと矛盾する。このような矛盾を生じさせないためには、条件 (III) がみたされなければならない。

### 1.5.3 機能的共通部分の実現形

表意単位の複数の実現形 (X, Y と記号化する) のあいだに対立のない文脈にあっては、これらの実現形を異なる表意単位の実現形だと言うことができない。ある文脈において X, Y が異なる表意単位の実現形であるためには、当該文脈において X, Y が対立することが必要である (1.4.1 を参照)。X, Y の対立が中和する文脈にあっては、X, Y を異なる表意単位の実現形とみなすことができない (1.4.2 を参照)。

したがって、X, Y に機能的共通部分が存在する場合、X, Y の対立が中和した文脈に現れる (その機能的共通部分を備えた) 実現形は、X, Y の機能的共通部分の実現形であると考えざるをえない。機能的共通部分がある X, Y を異なる表意単位の実現形であると「言えない」ためには、X, Y がどちらも、この機能的共通部分の実現形でなければならない。X, Y の少なくともどちらか一方に (X, Y が共有していない) 機能的な非共通部分が含まれていれば、これらの X, Y を異なる表意単位の実現形とみなすことが可能だからである。

## 2 複合過去記号素, 半過去記号素, 単純過去記号素について

### 2.1 複合過去記号素, 半過去記号素, 単純過去記号素の存在

複合過去の動詞形には、複合過去記号素の実現形が含まれる。たとえば (12) の *ai cherchée* と (13) の *cherche* を比べれば、*cherche* にはない表意単位の

実現形が *ai cherchée* に含まれていることは明らかである。複合過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたしている (1.2 を参照)。つまり複合過去の動詞形を特徴づける切片は、(13) の *cherche* にみられるように、他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。複合過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

(12) Je t'*ai cherchée* partout. (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.284)

(13) Je te *cherche* partout ! (Jean-Jacques Sempé & René Goscinny, *Le petit Nicolas*, Collection Folio, 1960, p.54)

(14) Le patron *était* un ami, [...]. (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.214)

(15) Le patron *est* un ami. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.20)

半過去の動詞形には、半過去記号素の実現形が含まれる。(14) の *était* と (15) の *est* を比べれば、*est* にはない表意単位の実現形が *était* に含まれていることは明らかである。半過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.2 を参照)。つまり、半過去形を特徴づける切片は、(15) の *est* にみられるように、他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。半過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

(16) Elle *raccrocha*. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Le Livre de Poche, 1959, p.42)

(17) Elle *raccroche*. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.

143)

単純過去の動詞形には、単純過去記号素の実現形が含まれる。(16) の *raccrocha* と (17) の *raccroche* を比べれば、*raccroche* にはない表意単位の実現形が *raccrocha* に含まれていることは明らかである。単純過去の動詞形を特徴づけるこの切片は、表意単位の実現形としての必要条件をみたす (1.2 を参照)。つまり、単純過去形を特徴づける切片は、(17) の *raccroche* にみられるように、他の切片 (ゼロ切片でもよい) と入れ換えることができる。また、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片は、記号素の実現形と考えられる。単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片だからである。

## 2.2 複合過去記号素：時間的な位置づけをもたない完了アスペクト記号素

複合過去記号素は、完了アスペクト記号素のひとつである。複合過去記号素とは、複合過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする表意単位のことである (2.1 を参照)。たとえば (18) の *Padwell est mort*, (19) の *il a repris la route*, (20) の *je suis mort* そして (21) の *un être qui a compté* における複合過去記号素の実現形はいずれも、事態が完了していることを明示する。実際、これらを未完了の事態として解釈することはできない。

(18) *Padwell est mort* il y a un an et demi. (Fred Vargas, *L'homme à l'envers*, Collection J'ai lu, 1999, p.293)

(19) Il *a repris* la route, maintenant, [...]. (Jean Echenoz, *Je m'en vais*, Minuit, 1999/2001, pp.187 – 188)

(20) Dans un an *je suis mort*. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.182)

(21) Un être qui *a compté* compte toujours. (Amélie Nothomb, *Ni d'Ève ni d'Adam*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.179)

複合過去記号素は、時制記号素ではなくアスペクト記号素であるため、それ

が表現する事態の時間的な位置づけを特定する表意機能をもっていない。(18)の *Padwell est mort* で表された事態の成立は、過去時間に位置づけられている。一方 (19) の *il a repris la route* は、現在時間に位置づけられている。(20) の *je suis mort* によって表される事態は、未来時間に位置づけられている。そして (21) の *un être qui a compté* で表された事態の成立は、過去時間、現在時間、未来時間のいずれにも特定されない。完了アスペクト記号素である複合過去記号素の使用は、時間による制約を受けないのである。

### 2.3 半過去記号素：無標の過去時制記号素

半過去記号素は、過去時制記号素のひとつである。半過去記号素とは、半過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする表意単位のことである(2.1を参照)。この記号素の本質的な表意機能は、事態に過去性を与えることである。たとえば、半過去記号素の実現形を含む (22) の *était* という動詞形は、この発話が表す事態が過去時間に属することに対応している。

(22) *Il était* une heure du matin. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.295)

(23) *Il est* une heure du matin ! (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.407)

半過去記号素は、無標の過去時制記号素である。たとえば、半過去記号素の実現形を用いた (22) の *il était ...* は「過去時間の時刻」を表している。一方 (23) の *il est ...* は「現在時間の時刻」を表現したものである。(22) の *il était ...* と (23) の *il est ...* の表意的な相違は、事態の時間的な位置づけが過去時間にあるか現在時間にあるかだけである。(22) における半過去記号素の実現形の存在意義は、動詞記号素を含む発話が表す事態に過去性を加えることであって、それ以上でも以下でもない。

## 2.4 単純過去記号素：過去時間にのみ適用される完了アスペクト記号素

単純過去記号素は、それが表現する事態を常に過去時間に位置づける。単純過去記号素とは、単純過去の動詞形を特徴づける最小の切片を実現形とする表意単位のことである（2.1を参照）。単純過去記号素の実現形を用いて表現した事態は、現実世界においても物語世界においても、過去時間に属するものとして位置づけられることになる。たとえば（24）の *elle soupira* は、それが現実世界の出来事であるか物語世界の出来事であるかにかかわらず、少なくとも現在時間や未来時間の事態ではありえない。単純過去記号素の使用は、事態の過去性と常に結び付いている。

（24）*Elle soupira.* (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Le Livre de Poche, 1959, p.14)

単純過去記号素は、事態の完了を標示する。実際、たとえば（24）の *elle soupira* を未完了の事態として解釈することは不可能である。（24）から単純過去記号素の実現形を除去した *elle soupire* には、未完了の事態としての解釈がありうる（これからため息をつくところだ、ため息をついている最中だ、などの解釈）。一方、*elle soupira* にはその可能性がない。単純過去記号素は、事態の完了と常に結び付いているのである。

以上より、単純過去記号素は、過去時間にしか適用されない完了アスペクト記号素とみなしてよいことになる。単純過去記号素においては、過去時制であることと完了アスペクトであることのあいだに弁別がない。単純過去記号素は「過去時間にしか適用されない完了アスペクト記号素」であることと「事態の完了を含意した過去時制記号素」であることが両立する記号素である<sup>3</sup>。

## 2.5 複合過去記号素と単純過去記号素の対立と排他的連関

複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形には、それらが対立する

---

<sup>3</sup> 単純過去記号素の表意機能的なステイタスについては、川島（2014b）を参照。

文脈が存在する。たとえば (25) の *j'ai compris* に含まれる複合過去記号素の実現形と (26) の *je compris* に含まれる単純過去記号素の実現形は、互いに入れ換えることができ、この入れ換えによって、それぞれの発話の知的意味に弁別が生じる (1.3 を参照)。したがって (25) や (26) は、複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形が対立する文脈であると言ってよい。また、たとえば (27) の *j'ai réussi ...* と *ce qui ne fut pas ...* にみられるように、複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形には使い分けの可能性もある。

(25) *J'ai compris*. (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.75)

(26) [...], *je compris* : [...]. (Amélie Nothomb, *Journal d'hirondelle*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.11)

(27) *J'ai réussi à obtenir le numéro de son domicile, ce qui ne fut pas une mince affaire*. (Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, pp.400 – 401)

複合過去記号素と単純過去記号素には、機能的な共通部分がある。複合過去記号素は、事態が完了していることを標示する完了アスペクト記号素である (2.2 を参照)。単純過去記号素は、過去時間にしか適用されない完了アスペクト記号素である (2.4 を参照)。つまり複合過去記号素と単純過去記号素は、完了アスペクト記号素であることを機能的に共有する。

完了アスペクト記号素であるという機能的共通部分を持ち、互いに対立する記号素は、複合過去記号素と単純過去記号素だけである。大過去の動詞形や前過去の動詞形は、過去時制記号素の実現形と完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。前未来の動詞形は、単純未来記号素の実現形と完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。接続法過去の動詞形は、接続法記号素の実現形と完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。重複合過去の動詞形は、ふたつの完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。条件法過去

の動詞形は、過去時制記号素の実現形、単純未来記号素の実現形、完了アスペクト記号素の実現形を含む連辞である。完了アスペクト記号素として認定できる（連辞ではなく）記号素は、複合過去記号素と単純過去記号素しかない。

以上より、複合過去記号素と単純過去記号素は、それらの対立に中和が成立するための前提条件をみたしていると考えてよい。複合過去記号素と単純過去記号素には、それらに対立する文脈がある。そして複合過去記号素と単純過去記号素は、排他的連関の関係にある（1.5.2を参照）。

### 3 過去時制記号素との共起における複合過去記号素と単純過去記号素の対立の中和

#### 3.1 大過去の動詞形における完了アスペクト記号素と過去時制記号素の実現形

いわゆる大過去の動詞形には、半過去の動詞形にはない記号素の実現形が含まれる。たとえば(28)の *avait fini* という動詞形には、(29)の *finissait* にはない切片が含まれる。この切片は、記号素の実現形としての必要条件をみたす(1.2を参照)。つまり他の切片（ゼロ切片でもよい）と入れ換えることができ、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片の内部には、それ以上小さな表意単位の実現形は含まれない。それが記号素の実現形だからである。

(28) À quinze heures, il *avait fini*. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.51)

(29) [...] ; il *finissait* sa garde dans un quart d'heure. (Marc Levy, *Et si c'était vrai...*, Collection Pocket, 2000, p.17)

(30) On *a fini* par s'arrêter. (Philippe Djian, *37°2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.148)

この実現形は、完了アスペクト記号素の実現形だと考えられる。半過去の動詞形とは異なり、大過去の動詞形には事態の完了を標示する表意機能が備わっ

ているからである。よって (28) の *avait fini* には、完了アスペクト記号素の実現形が含まれていると言ってよい (2.1 と 2.2 を参照)。

いわゆる大過去の動詞形には、複合過去の動詞形にはない記号素の実現形が含まれる。たとえば (28) の *avait fini* という動詞形には、(30) の *a fini* には含まれていない切片が含まれる。この切片は、記号素の実現形としての必要条件をみたす (1.2 を参照)。すなわち、他の切片と入れ換えることができ、その入れ換えによって発話の知的意味に弁別が生じる。この切片の内部には、それ以上小さな表意単位の実現形は含まれない。それが記号素の実現形だからである。

この実現形は、過去時制記号素の実現形だと考えられる。複合過去の動詞形と異なり、大過去の動詞形には事態に過去性を与える表意機能が備わっているからである。よって (28) の *avait fini* には、過去時制記号素の実現形が含まれていると言ってよい (2.1 と 2.3 を参照)。

以上の分析により、いわゆる大過去の動詞形には完了アスペクト記号素の実現形と過去時制記号素の実現形が含まれると考えられる。この分析は、大過去形の用法とよく合致してもいる。大過去形の本質的な表意機能は「完了した事態」を「過去時間に位置づける」ことにほかならない。

### 3.2 大過去の動詞形における複合過去記号素と単純過去記号素の対立の中和

同一の動詞形において、過去時制記号素と共起することのできる完了アスペクト記号素は、ひとつしかない。たとえば (31) の *avait dormi ...* や (32) の *avais promis* のような大過去の動詞形において、過去時制記号素と共起する完了アスペクト記号素は存在する。いわゆる大過去の動詞形には、完了アスペクト記号素の実現形と過去時制記号素の実現形が含まれると考えてよい (3.1 を参照)。しかし、大過去の動詞形に含まれる完了アスペクト記号素の実現形を、ほかの完了アスペクト記号素の実現形と入れ換えることは不可能である。そこ

に現れうる完了アスペクト記号素は、ひとつしかないからである。

(31) Le petit réveil indiquait 15h 10. Il *avait dormi* une demi-heure.

(Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.372)

(32) Mais tu m'*avais promis* ! (Martine Dugowson, *Mina Tannenbaum*,

Collection Le Livre de Poche, 1994, p.105)

したがって、過去時制記号素との共起において、複合過去記号素と単純過去記号素の完了アスペクト記号素としての対立は中和する (1.5.1を参照)。過去時制記号素と共起することのできる完了アスペクト記号素は、ひとつしかない。よって、当該の文脈において複合過去記号素の実現形と単純過去記号素の実現形を入れ換えることは不可能である (1.3を参照)。当該文脈にあっては、複合過去記号素と単純過去記号素の対立は成立しえないということになる (1.4.2を参照)。なお複合過去記号素と単純過去記号素は、それらの対立に中和が成立するための前提条件をみたしている (2.5を参照)。

以上の考察から、大過去の動詞形において過去時制記号素と共起する完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素の実現形でもなければ単純過去記号素の実現形でもないと考えざるをえない (3.3を参照)。複合過去記号素と単純過去記号素の対立が中和する文脈にあっては、このふたつの記号素のあいだに弁別がないからである。複合過去記号素と単純過去記号素のあいだに弁別のない文脈に、単純過去記号素との弁別を含意した複合過去記号素や、複合過去記号素との弁別を含意した単純過去記号素が現れるはずがない (3.3を参照)。

### 3.3 原完了アスペクト記号素：複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分

複合過去記号素と単純過去記号素の対立が中和した文脈に現れることのできる完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素と単純過去記号素の機能

の共通部分の実現形にはほかならない。複合過去記号素と単純過去記号素には、完了アスペクト記号素であるという機能的な共通部分がある (2.5を参照)。複合過去記号素は、時間的な位置づけをもたない完了アスペクト記号素である (2.2を参照)。単純過去記号素は、過去時間にのみ適用される完了アスペクト記号素である (2.4を参照)。したがって、両者には完了アスペクト記号素であるという機能的な共通部分がある。機能的共通部分をもつ複数の表意単位の間で対立が中和する文脈に、この機能的共通部分を備えた実現形が現れる場合、その実現形は当該の機能的共通部分の実現形である (1.5.3を参照)。

音韻対立の中和における「原音素」をまねて、複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分を「原完了アスペクト記号素」と呼ぶことにしよう<sup>4</sup>。複合過去記号素と単純過去記号素はそれぞれ、複合過去記号素と単純過去記号素が対立することを前提とする完了アスペクト記号素である (2.5を参照)。それに対して原完了アスペクト記号素 (複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分) は、複合過去記号素と単純過去記号素の対立を前提としない。いわば、複合過去記号素と単純過去記号素の対立の外側にある完了アスペクト記号素である。

原完了アスペクト記号素は、複合過去記号素でもなければ単純過去記号素でもない。原完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素の実現形と異なるとは言えない表意単位の実現形であるだけでなく、単純過去記号素の実現形と異なるとは言えない表意単位の実現形でもある。原完了アスペクト記号素の実現形を複合過去記号素の実現形あるいは単純過去記号素の実現形と入れ換えることができたとしても、そこに知的意味の弁別は生じないからである (1.4.2を参照)。このような実現形をもつ表意単位が、複合過去記号素でもなければ単純過去記号素でもないことは明白である (3.2を参照)。

---

<sup>4</sup> 原音素についての詳細は、たとえば MARTINET (1968) や AKAMATSU (1988) を参照。

### 3.4 ディスクールとイストワールの弁別と原完了アスペクト記号素

複合過去の動詞形は、BENVENISTE (1966) において、ディスクール (話, 談話) を特徴づけるとされる。つまり複合過去記号素の実現形の使用は、当該の発話がディスクールであることの指標であると考えられている。単純過去記号素については、逆に、その不使用がディスクールの指標となる。

単純過去の動詞形の使用は、BENVENISTE (1966) において、イストワール (歴史, 物語) を特徴づけるとされる。つまり単純過去記号素の実現形の使用は、当該の発話がイストワールであることの指標であると考えられている。複合過去記号素については、逆に、その不使用がイストワールの指標となる。

いわゆる大過去の動詞形に含まれる完了アスペクト記号素の実現形は、複合過去記号素の実現形でもなければ、単純過去記号素の実現形でもない。いわゆる大過去の動詞形には、完了アスペクト記号素の実現形が含まれると考えてよい (3.1 を参照)。この完了アスペクト記号素は、原完了アスペクト記号素にほかならない (3.3 を参照)。大過去の動詞形にあっては、複合過去記号素と単純過去記号素の完了アスペクト記号素としての対立が中和するからである (3.2 を参照)。

(33) Il m'a dit que vous étiez passés chez lui. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.180)

(34) L'inspecteur Meats m'a dit ce que vous aviez fait. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.106)

(35) Ce qu'il fit le lendemain : il était allé chercher Françoise à la campagne et n'avait pu m'appeler plus tôt. (Françoise Sagan, *Un certain sourire*, Collection Le Livre de Poche, 1956, p.90)

(36) Elle n'ajouta pas qu'elle avait déjeuné avec lui la veille [...]. (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Le Livre de Poche, 1959, p.43)

実際、大過去の動詞形はディスクールにもイストワールにも現れることができる。たとえば (33) の *étiez passés* は、ディスクールを特徴づける複合過去の動詞形 (*a dit*) と共起している。(34) の *aviez fait* も同様である。他方 (35) の *était allé* および *avait pu* は、イストワールを特徴づける単純過去の動詞形 (*fit*) と共起している。同様に (36) の *avait déjeuné* も、単純過去の動詞形 (*ajouta*) と共起している。大過去の動詞形に含まれる完了アスペクト記号素の実現形は、原完了アスペクト記号素の実現形なのである。原完了アスペクト記号素は、いわば複合過去記号素と単純過去記号素の対立の外側にある。

#### 4 まとめ

複合過去記号素と単純過去記号素の完了アスペクト記号素としての対立は、過去時制記号素との共起において中和する。したがって、いわゆる大過去の動詞形に含まれる完了アスペクト記号素の実現形は、原完了アスペクト記号素(複合過去記号素と単純過去記号素の機能的共通部分)の実現形である。原完了アスペクト記号素は、複合過去記号素でもなければ単純過去記号素でもない。

(37) *J'avais travaillé* comme une bête et *j'ai eu* les félicitations du jury...  
(Anna Gavaldà, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.461)

(38) Il *avait tout misé* et il *a tout perdu*. (Guillaume Musso, *Que serais-je sans toi ?*, Collection Pocket, 2009, p.34)

(39) Deux heures plus tard, il *fallut* réveiller Tom qui *s'était endormi* pour passer le temps. (Fred Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.55)

(40) Brendan *raconta* ce qu'il *avait découvert*. (Thierry Breton & Denis Beneich, *Softwar*, Collection Le Livre de Poche, 1984, p.308)

実際、大過去の動詞形に含まれる原完了アスペクト記号素の実現形は、ディスクールにもイストワールにも現れることができる。たとえば (37) において

大過去の動詞形 (avais travaillé) は、ディスクールを特徴づける複合過去の動詞形 (ai eu) と共起している。(38) の avait ... misé も同様に、a ... perdu と共起する。一方 (39) における大過去の動詞形 (était endormi) は、イストワールを特徴づける単純過去の動詞形 (fallut) と共起している。(40) の avait découvert も同じく、raconta と共起する。原完了アスペクト記号素は、いわば複合過去記号素と単純過去記号素の対立の外側 (ディスクールとイストワールの弁別の外側) にあると考えてよい。

## 参考文献

- AKAMATSU, Tsutomu (1988), *The Theory of Neutralization and the Archiphoneme in Functional Phonology*, John Benjamins.
- BENVENISTE, Émile (1966), *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard.
- 川島浩一郎 (2004) 「日本語の促音音素/q/と中和について」『武蔵野美術大学研究紀要』34, 25–32.
- KAWASHIMA, Koichiro (2010), « Neutralisation en japonais. Une application de la théorie d'André Martinet au Japon », Klein, J.R. & F. Thyron (eds), *Les études françaises au Japon. Tradition et renouveau*, Presses Universitaires de Louvain, 119–126.
- 川島浩一郎 (2014a) 「単純未来, 近接未来, 近接過去との共起における半過去と単純過去の対立の中和」『福岡大学人文論叢』45–4, 521–541.
- 川島浩一郎 (2014b) 「複合過去と単純過去の対立の中和」『ふらんぼー』39, 東京外国語大学フランス語研究室, 45–65.
- 川島浩一郎 (2015) 「接続法半過去形および接続法大過去形における半過去記号素と単純過去記号素の対立の中和」『福岡大学人文論叢』46–4, 899–923.
- MARTINET, André (1968), « Neutralisation et syncrétisme », *La Linguistique* 4–1, 1–20.
- MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier.
- 渡瀬嘉朗 (2012) 『統辞理論の周辺』三修社.
- WEINRICH, Harald (1964/1973), *Le temps — le récit et le commentaire*, Seuil.